

2013年12月21日

リーディング大学院沖縄研修報告書

人類進化モデル研究センター

技術職員 夏目尊好

12月11日～12月15日の日程で沖縄本島において研修をおこなった。以下に研修について報告する。

- ・日程：12月11日(水)～12月15日(日)
- ・目的地：沖縄こどもの国、琉球大学、ヤンバルの森
- ・同行者：岡本宗裕教授、鈴木紗織 (D1)、江島俊 (M2)、兼子明久、石上暁代 (技術職員)

12日は、沖縄こどもの国でのニホンザルの検疫をおこなった。私は、サルの検疫を経験したことがなかったが、技術職員であるならば経験しておくべき業務だということで今回の沖縄研修に派遣していただいた。そのため私にとっては、研修初日のこの検疫が最大の目的であった。霊長研以外の施設での作業は初めての経験であり、初めは作業の流れもつかめなかったのが不安だった。しかし、検疫の作業内容は毎年霊長研でおこなっている定期検診と同じだったので、次第に不安はなくなり周囲を見ていつも通りに動けるようになった。普段の検診なら50頭が2時間で終わるが、今回は8頭終えるのに3時間ほどかかった。時間はかかったが、特に大きなトラブルもなく無事に検疫作業を終えた。普段とは違う環境、メンバーで作業をおこなったことはいい刺激になり、とてもよい経験ができた。今回の経験を今後の業務にもしっかり活かしていきたい (写真1、写真2)。

12日の夕方には、琉球大学副学長の西田睦先生を訪問した。西田先生はとても優しい雰囲気の方であった。西田先生は、ご自身が研究されておられたリュウキュウアユについてお話して下さった。先生は、沖縄本島に生息していたアユを本土のものとは遺伝的に異なることを証明し、亜種認定して「リュウキュウアユ」と名付けたそうだ。しかし、1970年代には北部のヤンバルの森の川に多く生息していたリュウキュウアユも1972年の本土復帰後、インフラ整備や畑地開発のため急速に数を減らし、沖縄本島のアユは今では絶滅してしまったそうだ。先生が研究していたころは、小さな川の調査で毎回100匹以上獲れていたとおっしゃっておられたので、複数の悪因が重なるとこれほどの短時間で生物種が1つ失われてしまうのはとても恐ろしいことだと思った。ある生物種がとてつもない時間をかけて進化し、作り上げてきた遺伝子が、一瞬とも言える短時間ですべて消えてしまう。それほど大きな力を持っていることをヒトは、自覚しなければならないのだろうと考えさせられた (写真3)。

14日の午後からは、北部ヤンバルの森を散策した。散策したヤンバルの森は、比地大滝までの遊歩道で片道1時間ほどのコースだった。ヤンバルの森は、一見すると本州の森を大きな差がないように見えた。しかし森の木々をよく見るとガジュマルやヒカゲヘゴなど、本州では植物園の温室でしか見られないような木がたくさん生息していた (写真4)。またシリケンイモリやヤンバルヤマナメクジなども見る事ができた。私はアカハライモリ以外のイモリを見たことがなく、また野生のイモリを見たのも初めてだったのでとても感動した (写真5)。ヤンバルヤマナメクジは、10cm以上にも成長する大型のナメクジらしく、

実際に発見したものもかなり大きかった（写真6）。往復で2時間ほどの散策であったが、本州とはまったく異なる生物にたくさん出会うことができ楽しかった。今度、ヤンバルの森に来ることがあったら、もっと時間をかけて散策したいと思った。

今回の沖縄研修では、初めての経験を数多くすることができた。ニホンザルの検疫業務では、普段の霊長研の業務ではほとんど経験することのない、人慣れしていないニホンザルに対して緊張感をもって仕事することができた。また西田先生の訪問、ヤンバルの森散策を通して、普段意識していないと忘れてしまう沖縄の海以外の自然に触れることができた。そこには、本州とは異なる亜熱帯特有の植物、動物が暮らしており、その独特の姿は見ているだけでもわくわくした。今回は、沖縄本島しか訪れることができなかったが、機会があれば本州とは異なる生物を求めて西表島など沖縄の他の島々にも渡ってみたいと強く思った。



写真1. 検疫作業準備



写真2. 採血と入墨



写真3. 琉球大学にて
キャンパスはとても広く、キャンパス内にはデイゴや
ガジュマルが植えられていた。



写真4. ヤンバルの森
写真中央の幹に白い斑点があるのがヒカゲヘゴ



写真5. シリケンイモリ
尾が剣のように平たい



写真6. ヤンバルヤマナメクジ